

令和7年度 学校関係者評価書(様式)

評価項目		本年度の活動(具体的な手立て)と指標	成果と課題	今後の改善点	学校関係者評価
学力向上×ICT活用		①基礎的な学力の向上 ・教育活動全般で子どもたちの興味・疑問（はてな）をもとに活動を組み立てていく。また、C、D層の児童を授業展開の核としていく。 ・書く活動の拡大、充実（各授業） ②授業改善・教師の授業力向上 ・校内授業研究会の充実（生活科、総合的な学習） ・教育指導課「5年以下研」を活用した全校での研修 ・三重大学教職大学院との連携（前原研究室・市川則文講師） ・教員全員が自主公開授業を実施。公開1回以上、参観6回以上 ③ICT機器の活用について 授業や家庭学習において、より効果的な活用ができるとを目標にした。 ・ ICTシェアサイトの活用 ・校内ICT活用の報告（月1回） 一効果的な活用授業・家庭学習実践の共有 一校務DXの紹介など情報共有 ・自主性、主体性を育む「家庭学習」の創造（PTA家庭教育学級と共同） ・中学校区で連携した「スクリーンタイム」の削減（各校で独創的に）	○研究対象の教科が昨年度に引き続き総合的な学習の時間であったことから、教師一人ひとりの地域素材を生かした授業に対する理解が一層深まってきた。児童の問いや思いを出発点とした授業展開が定着しつつあり、主体的に学ぶ児童の姿が増加した。さらに、自分の考えを裏付ける根拠を求めて、自主的に地域に足を運び調査しようとする児童も見られるようになった。 ○教育指導課や三重大学教職大学院との連携を通して、生活科及び総合的な学習の時間における授業の本質や改善について学ぶ機会を得ることができた。 ○本年度は、教師全員が自主公開授業を実施し、授業を開いて学びあう風土の醸成が図られた。 △一方で、自主公開授業における参観人数の少なさが課題として挙げられる。 ○低学年では、半数近くが毎日活用している。高学年では、70％が毎日活用している。高学年では、66％が週に1回以上クロームブックを家庭学習で活用している。 ○高学年では、85％がクロームブックを使った家庭学習が学びやすいと答えている。 ○ICTシェアサイトの活用 4年生の社会科では、定五郎の動画教材を活用して授業を行ったことで学習が深まり、定五郎作文コンクールにおいて、最優秀及び優秀賞をとった児童がいた。 ○校内ICT活用の報告（月1回） オクリンクやICTシェアサイト、キャンバなどの活用方法を共有することができ た。スプレッドシートの固定など、個別最適な学びに適した使用方法を共有することができた。音読の録画や家庭でのお手伝いの様子の録画など、クロームブックを活用した家庭学習の共有ができた。 ○校務DXの紹介など情報共有 生成AIを問題づくりや調べるときなどに活用した。家庭訪問の個票作成や低学年の下校シートなど、校務についての取り組みを共有することができた。	お互い声を掛け合ったり、中堅・ベテラン教員がメンターとなって、若手教員を支援したりして公開授業に参加していく。 今後は、家庭学習でのクロームブックの有効な活用方法について、計画を立て、取り組む頻度を上げていく。	①ぜひ、お願いします。 ②進めてください。 ①C、D層の底上げは、重要課題だと思う。学校だけでなく、家庭の協力も必要。PTAのアンケートでも、授業参観へ前向きな答えが少なかったように思う。時代かもしれないが、学校に任せきりな感が見られる。 よくやっていただいています。引き続きよろしくをお願いします。 ①公立学校としてなら、まず平均的な学力をすべての子どもにとるべきと思うので、CD層の底上げを核というのは、頑張っていたきたいと考えます。それで、どう変化したかも報告いただけたらと考えます。 ①学力毎に応じたグループ分けでの教育良いことです。 ②先生方が住んでみえる地域ではないのに、子供らに地域のことを学ばせるのは、大変なことだと思います。先生方が、この地域のことを積極的に素人されている姿に頭が下がります。 ②地域素材を生かした授業研究に期待したい。各学年の指導計画や授業記録などの成果を、次年度の取組へ生かしていけるような取組を望む。 ②多忙の中で、参観人数の少なさを改善する具体的な方策を望む。 ②教員全員が自主公開授業また、他教員の参観に自己伸長を図りレベル向上。 ③クロムブックの取り扱いに乗り遅れている子はいないのか。効率的で、デジタル化は重要であると思うが、取り残される子がいないかが心配です。 ③学習においては便利になったなあと思います。しかし、家庭で、一人でタブレットに向かってるとき、どうも学習以外に使っているようで、その辺もどうするか、指導がいるのでは。調べ物も楽でもいいですが、紙の辞書を引くことがなくていいものか。 ③児童は、クロームブックを活用した家庭学習が定着しつつあると思われる。 ③授業参観の時にＩＣＴを活用した授業を見ることができた。児童は抵抗なくクロームブックを活用しているように思う。 ③「家庭学習でのクロームブックの有効な活用方法」については具体的な内容について関心がある。
	長期欠席対策	①情報共有による早期発見 ・tetoruを出退勤システムの横に置き、職員みんなが確認できるようにする。 ・朝の会時点で連絡のない欠席者宅には、担任あるいは教頭が家庭へ必ず電話連絡をする。 ②「鈴鹿市不登校対策初期対応マニュアル」の活用 ・初期対応（連続欠席3日目までの対応）を確実に行う。 ・不登校傾向の児童の家庭とは、連絡を絶たない。毎日の家庭連絡、家庭訪問の記録を必ず残す。支援会議、ケース会議の早期実施。 ③仲間づくり ・あいノート（生活などについて綴らせる）の活用 ・いじめの未然防止、早期発見 学期ごとのいじめアンケート、個別面談の実施	○出退勤システムの横に設置することで、必ず確認することができたと同時に、他学年の情報も職員間で共有しやすい。また、朝の会の時点で連絡のない児童に関しては、職員室に一報を入れ、教頭が家庭へ連絡をすることで、スムーズに対応することができた。今後も職員室、保健室等とも連携を取り、対応を円滑に行っていく。 △初期対応（連続欠席3日目までの対応）はほとんどできたが、担当者への情報共有を確実に行っていくことが課題である。 ○あいノートに週1回収り組むことで、児童生徒の学校生活や家庭での悩みを早期発見することができた。来年度は、職員会議等であいノートの取組を共有したり、月1回輪番制で各学年に割り当てたりしていきたい。 ○週に2回、打ち合わせて児童に関しての情報共有を行うことができた。また、いつでも確認できるようにデータ化した。 ○生活委員会がいじめの未然防止の取り組みを行い、啓発した。各クラス「いじめ防止に関する標語」を作成して、いじめ防止に関する意識を高めることができた。ピンクシャツ運動については、児童の意識も高まりつつある。来年度も児童が中心となって取組を行い、いじめ防止の意識をさらに高めていきたい。	欠席理由が体調不良の場合でも情報共有し早期対応につなげていく。	①情報共有は大切と考える。 ①家庭と学校の連携も必要ですが、先生同士の連絡なども必要だと思います。 ①tetoruの活用で情報共有できたことは評価できる。 ①良いですね。初期段階で保護者とのコミュニケーション大事です。 ②「欠席理由が体調不良の場合でも伝え合っていく」という部分の意味がわからないが、より効果的な共有を進めていただきたい。 ③小さいじめには話は見たり聞いたりすることがあります。家庭と協同して対応していく必要があると思う。 ③あいノートを書くのも見ていると、ひんぱんに書くのは、大変なのですが、書きやすい(文章を書くのが苦手な子にも)課題を選んで書かせると、話せないけど、本当はこう、という子どもが抱えている問題が出てくるのでは、上手に使うと問題解決につながるかも、です。 ③あいノートによって児童一人一人の思いを把握することは効果的だ。多忙な中で大変だと思うが、家庭学習の一環としてグループ別に提出させたり、児童が書きたいときにも書けるようにしたりと工夫をしていただきたい。 ④良い取り組みだと思う。家庭・PTAと協同して進めてほしい。 ④今後でも活用をお願いしたい。 ④継続していただきたいと思います。 ④生きづらしい等の問題は、子どもだけ、子ども同士だけの問題でなく、親子の在り方とかもあると思います。学校だけで解決できるのではなく、というのはとても難しいことです。学校としては、こういう対応をしています。うちでも、こういう話題で話をしてみませんかという発信を時々提案してみたらどうでしょう。 ⑤様々な職種の仕事が児童に関わっていただいている。職員間の情報共有は大変だと思うのですが、今後も全職員での取組を進めていただきたい。

	担任や特任コーディネーターは、SLSが児童の様子から感じたことや、保護者、児童から聞き取った不安や悩み等の思いを、SLSとの会話や活動日誌等によって把握するよう努める。 ⑤チーム学校、チーム学年で「居心地のよい、安心安全な学級づくり」を支援	○学期ごとにいじめアンケートを実施した。実施後すぐに、いじめ防止対策委員会を開き、アンケートの情報を共有した。また、個別に面談を行う方法や保護者への連絡方法などを確認することで、スムーズな対応ができたため、継続していきたい。 ○「ほっとルーム」は4月～1月まで定期的に利用している児童は4名。単発的に利用している児童は4名いた。ほっとルームの利用方法について全職員で確認した。長期目標と、短期目標を立て、スモールステップを重ね、教室復帰を目指した。「見守っていきたい子」は人権部会や職員会議、特別支援教育推進委員会などで毎月確認した。継続して行っていたい。		
非 認 知 能 力 育 成	①非認知能力育成の取り組み（4～6年） ・非認知能力アンケートを5月と11月に行う。アンケート結果を職員や児童にフィードバックをする。 ・児童へ鈴鹿市で大切にしている「やりぬく力」「自制心」「自己肯定感」「社会性」の4つの非認知能力について知らせる。(学活等) ・日々の教育活動の中で、非認知能力を伸ばせるよう意識して取り組む。 ・職員は児童の活動場面において、ほめる、称賛することを常に意識する。 (1～3年) ・必ずしも児童に非認知能力について示す必要はないが、日々の教育活動の中で働きかけを行う。 ②読書活動の推進 ・朝学習での読書活動、図書の時間の確保 ・図書館担当による推進活動(クラスルームで全校児童に直接発信) 「先生のお薦め本」「読書チャレンジ」「読書の木」「多読賞」「親子読書」等 ・地域との協働的な取組の創造	○「人が困っているときは、進んで助けている」という項目は、4月に7・3％であった否定的回答割合が、ペア活動、グループ活動、あいノートなどで児童同士をつなげる活動を進める中で、11月に3・4％と減少したことは成果である。 △4～6年生とも学年による差異はなく、課題への向き合い方や、自律に課題がみられた。また、約3分の1の児童が今の自分に満足感をもっていないという結果であったが、これは4月に行われた全国学力・学習状況調査の「自分には良いところがあると思う」の否定的意見については、4・6％(全国平均13％)が11月には8・6％と増加した。 ○図書委員がイベントを考え実施することで、委員の児童自身が読書の大切さの意識を高められた。 △朝学習での読書活動、図書の時間の確保については、クラスや学年でばらつきがある。 △図書館担当による推進活動について、積極的に取り組めていないところもあった。	自分を客観視できるようになったと見ることもできるが、今後、ポジティブ行動支援(PBS)で他者から認められる場面を増やしていく。また、アンケートの結果を鑑みて、適切な言葉かけやノート等の温かいコメント・メッセージを意識して行っていく。 給食を食べ終わったあとやテストが終わった時間は読書の時間としたり、授業で図書の時間を確保したりする中で、図書室の利用を増やしていきたい。 特に高学年は取り組み児童が少なかったため、アンケートや児童のアイデアを生かしながら、児童の興味にそった取り組みを行っていく。2月からは、給食の後や、テストの後などの時間に、chromebookを操作するのではなく、読書をしていくように学校全体で取り組んでいく。また、巡回指導員の勤務日には、放課後10分間の図書館の開館も行い、貸し出しの機会を増やす。	非認知能力の育成には力を入れていってほしいです。自分で考え、自分で行動する、生きていく力が必要だと思います。 ほんの小さなことで声かけしてほめる、そんな大人でありたいと思います。子ども同士でも、そんな機会を作ったりということもわざわざ設定してもいいかもしれませんね。 ②読書は、家庭で本を読む環境が一番需要であると思う。 ②図書担当のよきアイデアを児童とともに推進していただきたい。 ②図書イベントでは、読んだ本の内容を伝えないとシールがもらえないと聞いた。人に伝えることが大切なのはわかるが、伝えるのが苦手な子にとっては億劫に感じるのでイベントに参加しづらい。いろいろな方法での伝え方があると参加したいと思えるかもしれないと感じた。 ②朝でも、昼休みでも①お分読書等わざわざ本と向き合う強制的な時間があってもいいかもしれません。教科書から、物語が減って味わってほしい文章に触れる機会が減ったのは悲しいことだと思うので、ぜひ紙に書かれた話を読む機会を増やしてほしいです。 ②新校舎の1階のブースに設けていただいた図書のコーナーがあるので、利用する子どもたちも増えてきているのではないかと思います。 ②朝学習での読書活動、図書の時間の確保については、クラスや学年でばらつき」の理由について明らかにして、確保している学級の取組を共有して、無理なく時間の確保をしてほしい。
	①地域素材を生かした教育活動の創造 ・子どもたちが地域に関心をもち、地域から学ぶ授業づくり ②保護者、地域への学校情報の積極的発信・学校だより、メール配信による情報発信(クラスごとのグループ登録の有効活用) ・学校運営協議会を通して、子どもたちの課題、学校の課題を共有。学校・保護者・地域が、それぞれの立場でできる取組を考え、実現していく。 ③地域行事への積極的参加 ・サマーフェスタ、敬老会、収穫祭等への積極的な参加、協力。 ・児童、保護者がたくさん参加できるようPRや運営にも学校として参画・協力 中学校区内の幼小中との連携 ①人権教育連絡協議会の活動 ・校区人権教育カリキュラムの実践、綴り方の取組、自己有用性の検証、教育的に不利な環境にある子どもの見守り ②健全育成活動の連携 ・地区補導：年4回・夏季夜間パトロール ・ノーメディアデーの実践-集計したデータを数値化し、学校だよりで周知する。 ・あいさつ運動-毎週(月・水・金)児童会を中心にあいさつ運動を行う。また、金曜日は各クラスごとに全員であいさつ運動を行う。 ③学力向上の連携・指導教諭の公開授業 ④不登校対策及び特別支援教育の連携 ・特別支援コーディネーター会議：年5回 ・不登校対策委員会：年4回・1回	○生活科・総合的な学習・社会科の学習において、地域素材を基に問いを立て、追求する学習を展開した。その過程で、児童は地域への愛着心を高めるとともに、地域で働く人々の思いや願いに触れ、自己の考えや生き方を見つめ直す機会をもつことができた。また、地域の方と単元構想図を事前に共有することで、円滑な連携が可能となり、学習内容の深化を図ることができた。 ○Tetoru、まちコミを活用して、積極的に情報を発信してきた。保護者アンケートでも、98・3％の保護者が肯定的な回答をしている。 学校運営協議会では、学校の活動だけでなくPTAの活動や地域の活動についても紹介し、それぞれの立場で子どもたちのために行っている活動について知りあう機会となった。 ○保護者の76・2％が積極的に参加・どちらかといえば参加に回答をしている。学校も、参加のよびかけをしったり収穫祭で学校の取り組みを展示したり、先生たちが参加するなどして、地域行事に協力することができた。 ○連絡協議会では、各校の実態と人権課題を共有することができ、課題の解決に向けた取り組みや実践の共有ができた。また、各校のカリキュラムを持ち寄って確認をすることで、自校のカリキュラム作成の見直しに活かすことができた。他校の実践の還元も積極的に行っていたい。 ○「地区補導」-定期的に行うことで、中学校区の情報を共有できただけでなく、きまりについてなど自校の生活指導に役立てることもできた。小中が連携して指導を行っていたい。 ○「あいさつ運動」-児童会を中心にあいさつ運動も行なっており、徐々に松	たくさん児童が地域行事に参加することができていたが、地域行事が何かわかっていない児童も多く見られたため、学校からも積極的に周知活動を行っていく。	①地域の人々から聞く受け身ではなく、地域素材を基に児童が問いを立て、追求する学習は、実践の成果を挙げつつある。 6年の「ロゲイニング」は、新しい試みとして興味深かった。 地域の関係者が、ゲストではなく普段の地域の関わる学習の場面の参観をする機会をつくってもらってもよい。 ①子どもの健全育成は学校、保護者、地域の関わりを密にして取り組み、今後も継続していってほしい。 ②学校でのボランティア支援について、マチコミメールで発信してもらえようによってよくなるので参加・協力しやすい。 ②保護者の意見を学校だよりで掲載したり、PTAがマチコミによる保護者の意見の集約をしたり、学校と保護者双方の情報交換が進んでいる。 ②150周年に合わせて、来年度は懸案であった運動場への出入り方法と児童の送迎のための駐車スペースの確保について、PTAや地域の協力を得ながら実現していただきたい。 ③地域行事への参加が少ない。 盆踊りはこどものできるダンス等を。 ふるさとめぐりはこどもを対象としたポイントを。 ③稲生をよく知り、愛してもらえよう、地域学習を協同で進めていきたい。地域学習に対する家庭の意見を聞いてみたい。 ③5年ほど前に、夢協とPTA役員との懇談会で、市報や夢協だよりは読まない人が多かった。そのため、夢協でInstagramのアカウントを立ち上げ、地域行事の案内や活動報告を行っている。フォロワーも4000名を超え、案内や活動報告は1000～2000の閲覧がある。現状の周知活動で不足があるのかPTAで聞いていただきたい。 ③協議会の中で話がありましたが、こどもたちも「自ら催す」側になっての参加を考えてもらう。 ③校長先生の地域へのネットワークの円滑なる動きのおかげで心より感謝している。 ③地域行事用の掲示コーナーとかあってもおもしろいかな。 ③会議の中でもありましたが、お知らせをもっと子どもたちに届くようにしたらいいのではないのでしょうか。 ③地域行事への参加を学校で積極的に働きかけていただいている。 (保護者は朝)この地域に住んでいると、いろいろな方と接するので、保護者の役割が積極的に参加し、子ども

地域連携	・个登校担当有云・学期に1回 ⑤夏季校区研修会の実施（生徒指導、人権教育、学力保障、非認知能力） ⑥中学校区合同学校運営協議会の実施	○「あいさつ運動」…児童を中心にあいさつ運動を行うことで、徐々に挨拶する児童が増えてきた。また、各クラスごとに行うことで、自分事として捉えることができ、普段の自分たちの挨拶を見直すきっかけとなった。 △登下校時に地域の方々やボランティアの方々、どの教員に対しても挨拶ができるように指導していきたい。 △「ノーメディアデー」…スクリーンタイムを減らそうというタイトルで実施。一週間スクリーンタイムの記録を取ったが、1日5時間以上の子が各学年数人いた。 ○本年度は、各校の指導教諭が公開授業を行い、若手教員を中心に研修に参加することができた。 ○中学校区で綴り方の取り組み方法について共通理解を図ることができた。 校区夏期研修会を通して教師が児童の抱える困り感に寄り添う指導を行うため、児童が綴ったものをどう読みとるか、学びを深めることができた。 ○稲生小学校の運営委員が白子中学校と天栄中学校に分かれて中学校区合同学校運営協議会に参加することができた。白子中学校では子ども食堂について講演を聞いたり、天栄中学校では学校再編に関わるグループワークに参加したりするなど、校区の学校運営について話し合うことができ有意義であった。 △天栄中学校区の学校再編の話は市内の学校適正化を考えていくうえで有意義であったが、稲生小学校は対象外となっているため、自分事と考えて参加することは難しかった。稲生小学校も自分事として考えることができる内容を協議していく。	目標の設定時に指導が必要。また、児童の実態が掴みやすいデータからアセスメントのしやすい調査の仕方を考えていく。児童にどのようにメディアと付き合うかを考えさせる取組にしてい	③保護者には新しくこの地域に住んに入居が多いと思われているので、地域行事が何かわかっている児童が多いのは当然のことだと思う。地域教材の中で少しでも理解を深めることができればよいと思う。 子ども食堂「稲乃屋」 毎回多くの方に来てもらって繁盛しています。先生にも何名か来てもらい、喜んでもらっているように思います。参加される家族が毎回同じなのはどうだろうと考えます。「子ども食堂」という名称が良くないのか。実際に「私たちも行ってよいのか」や「そんなところ行きたくない」など聞かえてきたりします。まだ今のところ決定ではないですが、「子ども食堂・稲乃屋」→「夢協食堂・稲乃屋」へと考えています。名称変更したら新しい人が来てくれるかな 中学校区内の幼少中との連携 ②スマホでのゲームを少なくするためには、各家庭で少しく指導はできないか。 ②登校指導をしていて、稲生小の子たちは元気に挨拶してくれました。 ②家庭の教育の仕方だと思う。テレビ・スマホを見せれば静かです。読書しないのもそこだと思う。 ②なかなか困難ではあるが、児童に考えさせていっていただきたい。 ②登下校時は知らない人に声がけされてもなかなかあいさつはできないでしょうね(今の時代) ②なんでスクリーンタイムが多いとだめなのか説明が要りますね。 ②ボランティアで学校に来た時も目が合うと、大きな声であいさつをしてくれると、私たちも気持ちがいいです。知らんぷりをされるとときもありますが、こちらから挨拶をしています。 ③児童の毛染めやメイクについて、中学校区で情報交換や指導について共通理解を進めていただきたい。 ただ、学校からの一方的な指導というのではなく、保護者間の多様な意見を公開し熟議しながら、中学校区の実態や考えを学校から発信をしてほしい。 ⑥稲生小の卒業生はすべて白子中に進学と聞いているが、また白子中がマンモス校とならないのか。 ⑥天栄中学校区では学校再編の話が喫緊の課題であることは理解できる。議題がこれのみであれば、稲生小からの参加は子送っても良いと思う。 鈴鹿市全体の児童減少の問題や、天栄中の学校活動や児童に関することであれば参加する意義はあると思う。
学校における働き	①「チーム稲生小」「チーム学年」として、主体的・組織的に行動する教職員、職場づくり ②健康で前向きに働ける職場づくり ➡ 月45時間、年間360時間を超える時間外労働：0人 ➡ 定時退校日の時間外労働者：10%未満 ➡ 60分以内に会議を終了（職員会議、校内研修を除く）：100% ③職員の意識改革 ・職場全体で課題を共有し、業務の効率化（勤務時間についての認識を共有、定時間集中）と引き算の意識（止める、保護者・地域等に委託する）をもつ。 ・保護者・地域等へのお知らせ・啓発などメール配信システムを活用する。 ④SSS、SLS、学習指導員、ボランティア等の効果的な活用。例えば、学習支援（九九、数の合成・分解、習字、読書指導）、お掃除応援（特に汚れているところ、指導支援）	○学年会の日を設定し、学年の共有の時間を取った。 特別支援Co、人権部長、生指部長に情報が集約し、児童への対応・事案など早期対応を組織的に進めるようになってきている。さらに主任を中心とした学年運営、主任同士の情報交換の場を適宜とっていくことで主体的・組織的な取り組みようになっていく。学年が自走できるように職員同士のつながりを大切にしていく。 ○月45時間を超える時間外労働は12月時点では0人、360時間については数名出そうである。定時退校は、月2回設定し、その日守れないこともあったが、近隣の日に退校し守れた。三部会、学年会など、基本的には60分以内を意識し、終了した。しかし、毎月45時間に近い時間外労働をしている職員が数名いたため、合計すると360時間を超えようとする結果になった。途中経過や校務分掌の見直しの働きかけは行ったが、見直しは難しかった。 ○業務については、繁忙期を避けるよう年間計画を作成。今後とも意識して取り組んでいく。また、メール配信を活用して印刷等の時間を削減した。また、保護者に行事のアンケートを取って、学校運営に参画してもらった。具体的には、授業参観の日程の意向を開き、本年度の授業参観の持ち方を決めたり、窓側の掲示物を外し参観しやすくしたりするなどした。 ○毎月第二木曜日2・3限目に図書ボランティアと図書巡回指導員と時間を合わせていただいたので本の整理整頓など効果的に行うことができた。 ・毎週水曜日・土曜日環境ボランティアが、花壇等をきれいにしてくださった。 ・毎朝の見守りボランティアに見守っていたとき、児童は安全に登校できた。 ・毎月一回金曜日読み聞かせボランティアに、本を読んでもらうことを児童は楽しみにしている。地域コーディネーターと相談し、低・中学年中心に高学年を含めて今後お願いしていきたい。 ・学習ボランティアに入ってもらい、家庭（ミシン、調理実習）安全に取り組むことができた。 △学習ボランティアに、4月から1年生の朝の準備を手伝っていただいた。打ち合わせをきちんとしてボランティアをお願いしなければならぬ。 ○地域学習ボランティアには、町探検等の地域学習・地域行事の安全見守	引き続き、計画的に年間計画を作成し、繁忙期ができないように行事の時期の見直しをしていく。 ボランティアの方にどのように動いていただきたいのか、しっかり伝えていく。また、依頼については今年度に引き続き、学年で相談したうえで、管理職にも相談し発信していく。	①外部からはわからないが、「チーム稲生小」「チーム学年」として、主体的・組織的に行動する教職員、職場づくりが成果を挙げているとすれば、望ましい。 ①先生方の働き方は各先生個人に任せるのではなく、学校全体で取り組み、負荷低減を図ってください。 ④ボランティアに登録しているが年間活動のなかった方もみえる。名簿を再び新しくしていただいてもよいかと地域コーディネーターは考えている。 ④職員の方々、いつも明るい顔で、きびきびと動いてみえて、見かけると、頑張ってもらってるなあと思います。ボランティアの方々も、協力できることはお手伝いしていこうと思っていますので、今後とも、何なりと。 ④各種ボランティアの活動は、定着してきている。 ④まちコミメールを活用したボランティア募集は、迅速にできてよい。 ④ボランティア募集に関する質問等は、ボランティアのライングループ上で情報交換して、必要に応じてコーディネーターが仲介する、そのあたりの対応がスムーズにできるとよい。

方 改 革	⑤教育活動や各行事直後の改善案作成 ・行事後の反省を元にした、担当者による改善案の作成（行事が集中しないように、学校全体を見渡した年間計画の見直しも含めて） ・分掌データの整理（誰でもわかるように）	○準備等をしていただき、子どもたちが安全に意欲的に学ぶ支援をしていただいた。 △依頼書で伝わらない内容もあるので、直接お話をして支援の内容を確認していかなければならない。ボランティアの依頼の仕方として、学年で相談し、管理職のチェックを受けた後担当が配信できるようにしていきたい。掃除時のみまもりボランティアは大掃除のときをお願いしていく。 こどもがボランティアさんの顔と名前を覚えていけるように、ボランティアの掲示物等の整理をしていく。 ○教育活動や各行事について反省事項をあげ、課題を抽出することができた。大きな行事では、保護者へのアンケートを行い行事の改善に活かすことができた。運動会などは改善案まで作成できたが、できない行事もいくつかあった。浸透させていくことが今後の課題である。引き続き繁忙期が出ないよう行事を分散していくこと、教育活動・行事のリデザインを徹底していくことが必要。 △分掌データについては、校務分掌表に合わせた形にしたが、慣れていない職員がいたため、「その他」フォルダでまとめてしまうところがあった。慣れていく必要がある。	校務分掌について理解を図りながら、分担を決めていくことで、データの保存場所を周知していく。	
研 修 推 進	①ミニ研修について 若手教職員のニーズに応じた研修内容を設定するため、事前に「授業で困っていること」「聞いてみたいこと」などをアンケートで集約する。その結果をもとに、月に1回のペースでミニ研修会を実施する。 ②研修だよりの発行 ・総合的な学習の時間の授業に対する考え方、理論の提唱→「授業改善」「全体計画の作成」「単元計画の作成」「評価」「実践事例の紹介」 ・ミニ研修会の還流 研究授業の振り返り、教育指導課（アドバイザー）の助言のまとめなど	○若手教職員を対象にアンケートを実施し、研修内容を決定したことで、ニーズに合わせた研修を進めることができた。月1回のペースで研修を行うことで、継続的な若手教職員の資質や能力の向上へとつながった。指導教諭の理論的背景と自身の実践を交えた紹介により、若手教職員がすぐに活用できる学びの機会となった。 ○研修の終盤には、当日の内容に関連した日常の悩みや困りごとを共有する時間を設けている。参加者同士で経験や考えを交流することで、互いの学びが深まり、実践への意欲向上にもつながっている。 △すべてのアンケートの要望に応えることは難しいため、内容の決定は複数人で計画的に定めると良かった。指導教諭から学んだことを、どのような実践につなげたのかを紹介する場も設けたが、授業改善につなげる取り組みとして適切であったか疑問が残った。 ○研修だよりを月に2回以上発行することで、総合的な学習の時間に対する教職員の意欲の向上を図ることができた。また、学習指導要領に示されている総合的な学習の時間における効果的な指導の実践例や、その本質に触れる内容を共有することで、授業改善につなげることができた。さらに、研究授業の振り返りを研修だよりに掲載することで、研究授業を単発的な取組で終わらず、継続的な学びへとつなげる一助となった。	ミニ研修等、内容を聞くだけで終わらせるのではなく、「まずやってみる」の意識を職員みんなが持ち、実践していく。	